

現代タイにおけるグッド・ガバナンスの一断面

—相互行為の過程で語られる「良き」統治—

高城 玲

1.はじめに

1990年代以降、主に国際機構を中心にしてグッド・ガバナンス (good governance : 良き統治) の議論が注目されている。特に、国際的な開発援助の分野において、国連システムとしての世界銀行やIMF (国際通貨基金)、OECD (経済協力開発機構)、UNDP (国連開発計画) などが¹、経済発展に必要な不可欠なものとして重要視しているのが、グッド・ガバナンスだと言える。近年の開発援助の世界において、このグッド・ガバナンスが、実際の援助の可否や多寡、選択と集中を判断していく際の、ひとつの重要な判断基準となっているのである。

しかしながらこの概念は、そもそも何がグッドとされ、ガバナンスとは如何なるものなのかという点に関して、論じる主体によって多様な差異を含み持つ概念でもある。そうした多様な差異を捨象し、均質で単一的な価値基準のみで、世界各国の援助を判断していくことに対しては、これまでもいくつか批判の眼が向けられてきた²。そこでは、国際機構や援助する側の視点と論理があまりにも優越しており、具体的な現地社会の実態や論理、多様性を軽視しすぎていることが指摘されている。

本稿は、タイでの事例を題材に、グッド・ガバナンスに関する現地社会の実態と論理の一断面を明らかにすることを目的とする。特に、タイの農村社会という行政末端の政治的な統治の場において、何が具体的に「良き」ものとして語られ、行為されているのかという微視的な側面に焦点を当てること

1 それぞれIMF (International Monetary Fund)、OECD (Organisation for Economic Cooperation and Development)、UNDP (United Nations Development Program)。

2 この点に関しては、井上 [2006] や佐藤 [2001]、下村 [2006]などを参照。

で、現地の実態をその文脈の内側から検討したい。つまり本稿は、統治の現場から遠いところで策定される制度的なグッド・ガバナンス論ではなく、人々がそうした制度や統治を日々生きている行為の過程に視座を定め、その地平からグッド・ガバナンスのもうひとつの側面に光を当てる試みでもある。

以下、まず2ではこれまでの国際機構で議論されてきたグッド・ガバナンス論を簡単に振り返りながら、指摘される問題点を確認する。次に3では、事例として取りあげるタイの社会的な論調において、グッド・ガバナンス論やガバナンス論がどのように展開されてきたのかを概観する。その上で4では、タイ中部の農村における、国家や行政が積極的に住民に関わる統治の現場に焦点を当てる。国家による研修や訓練の場所などにおける具体的な人々の相互行為にまで分析の根を下ろし、そこで何が「良き」統治として語られ行為されていくのか、フィールドワークによるデータから明らかにしていきたい。

2. 国際援助機構のグッド・ガバナンス論

ガバナンスという言葉は、今日ではよく使われる言葉であるが、一般的用語として古くから使われてきたわけではない。現在のガバナンス論に連なる用語としてこの言葉が最初に使用されたのは、1989年の世界銀行によるアフリカ開発に関する報告書においてである[World Bank 1989]。この背景には、1980年代に世界銀行が経済面で進めた構造調整による開発援助プログラムがうまく機能しなかったことが指摘される³。何故うまく機能しなかったのかという問いに対する答えが、被援助国側の意志決定プロセスや制度のあり方という政治的なガバナンスの問題として提示されたのである。

1989年の世銀報告書では、サハラ以南のアフリカの開発がうまくいくためにはガバナンスが重要だという認識が強調され、それに引き続く1992年の報告書では、「ガバナンスとは、ある国の経済的・社会的資源を開発するため

3 グッド・ガバナンス論が登場してきた背景としては、他に、冷戦終結による環境の変化、世界的な民主化の動き、援助する側がそれまで長年の援助に疲弊していたこと、紛争予防としてガバナンスの重要性が認識され出したことなどが挙げられる。この点に関しては佐藤 [2001]などを参照。

に活用する際の権力行使のあり方」[World Bank 1992 : v] とされている⁴。1980年代末までの国際機構による開発援助の基本的な目的が、経済的な発展の推進にあり、対象も経済分野か社会分野に集中していたというスタンスから見ると、上記の1989年世銀報告書に見られるような政治的なガバナンスの概念は、その後の開発援助の新たな方向を示唆するひとつのターニングポイントだったと言える。

世銀と歩調を合わせたIMFも、『グッド・ガバナンス—IMFの役割』と題する報告書で、経済の繁栄のためには、あらゆる面でのグッド・ガバナンス、すなわち、法の支配、公的部門の効率と説明責任、腐敗との戦いなどが不可欠であることを指摘している [IMF 1997]。その後、政治的なガバナンス概念重視への傾斜は、世銀が1999年に「包括的な開発の枠組み」の中で、持続的成長と経済的な貧困撲滅のためには、「良い清潔な政府 (good and clean government)」が必要不可欠だとすることで強まっていった [World Bank 1999]。

OECDの開発援助委員会であるDAC (Development Assistance Committee) も、貧困の解消や経済発展にとって、人権や参加、民主主義、グッド・ガバナンスなどの重要性を指摘している [DAC/OECD 1996]。UNDPはより政治面での言及に踏み込んで、援助はグッド・ガバナンスの促進を支援するものであると位置づけ、政府がNGOなどと共に取り組むよう支援すると明記している [UNDP 1997]。

こうした国際的な流れの中で、日本のJICA (国際協力事業団 [現国際協力機構] : Japan International Cooperation Agency) も1995年の『参加型開発と良い統治』という報告書の中で、良い統治の概念を、民主化志向を持っているか否かの「国家のあり方」と、政府が効果的・効率的に機能し得るかという「政府の機能のあり方」のふたつに区分して議論している [国際協力事業団 1995 : 28-32]。ここでは、民主化への動きをグッド・ガバナンスの重要要素としている点特徴的である。

上記のように、主に国際的な援助機構で主導されてきたグッド・ガバナ

4 具体的には、ガバナンスの要素として、公的部門の効率性、予測可能な法制度、説明責任、透明性、情報公開などを挙げている [World Bank 1992 : 3-6]。

ス論は、政治面への傾斜を強めながら相互に関連しており、最大公約数的な標準的グッド・ガバナンス論として整理することができる。標準的なグッド・ガバナンス論の構成要素として指摘されるのは、民主化、政府の権力行使のあり方(説明責任、透明性、公開性)、法の支配の確立、有効に機能する公的部門、汚職・腐敗への抑制、過度の軍事支出への抑制などである [下村 2006 : 37-38]。

しかしながら、こうした国際援助機構による標準的なグッド・ガバナンス論にはいくつかの批判が寄せられている⁵。ここでは中でも、次の批判に注目したい。つまり、歴史的・社会的・文化的背景に根ざす被援助国家の多様な特性に対する配慮が不十分なまま、グッド・ガバナンスという西欧社会の価値観を画一的に適用して良いのかという批判である⁶。つまり、国際機構の標準的な議論は、社会の多様性を捨象したあまりにも平板で画一的なものとして対象国家を捉えすぎており、多様な歴史や文化を持った社会の具体的な事例に十分な注意を向けずに、国内政治に介入しているというのである。

国際援助機構が主導する標準的なグッド・ガバナンス論を、対象社会に画一的制度として適用させたとしても、西欧社会に適合的だった制度が、必ずしも他の社会にうまく適合するとは限らない⁷。そこで求められるのは、多様な現地社会の論理と実態に注目し、具体的な統治の現場から議論を立ち上げるといった姿勢であろう。つまり、当該社会で、どのようなガバナンスが焦点となっており、具体的に何が統治の現場で「良き」ものとして語られているのかというより微細な視座が必要とされるのである。

5 ここで指摘する批判は、1950年代に展開された科学的行政管理の途上国行政への導入(グッド・ガバメント論)への批判とほぼ同じであると指摘される。対象社会への十分な理解を欠くままに導入されたグッド・ガバメント論は1960年代には行き詰まりを見せ、70年代初頭に消滅している。大西は、グッド・ガバナンス論もその轍を踏まないようにすべきことを説いている [大西 2004]。

6 他には次のような批判もある。国際援助機構が援助の条件として求めるグッド・ガバナンスが、被援助国側の主体性を損なう可能性についての批判、ガバナンスの不備を理由とする援助削減によって最貧層の人々へのダメージが及ぶことへの批判などである。この点に関しては、井上 [2006] や佐藤 [2001]、下村 [2006] などを参照。

7 ノースは、公式の制度が導入されたとしても、それに関連する慣行や歴史、文化などの非公式な制度が対応しない限り、制度は当初の意図通りに機能しないことを指摘している [North 1990]。

以下本稿では、タイを事例にして、グッド・ガバナンスに関する現地社会の論理と実態の一断面に焦点を当てていきたい。

3. ガバナンス論とタイ

ここでは、事例として取りあげるタイの社会的な論調において、ガバナンス論やグッド・ガバナンス論がどのような文脈で捉えられ、論じられてきたのかまずは概観しておきたい。

タイにおいて、ガバナンス論、グッド・ガバナンス論が積極的に語られ出したのは、1997年7月のアジア通貨危機の発生以降である。パーツ下落をきっかけに危機の震源地となったタイは、その後IMFや世界銀行、日本などから172億ドルにも及ぶ巨額の融資を受けることとなる。その際に、国際機構から支援のコンディショナリティとして厳しく求められたのが、ガバナンス論、グッド・ガバナンス論などを背景とする様々な条件や制度の整備であった⁸。これを契機に、タイ国内でもガバナンスをめぐる議論が積極的になされていくが、その文脈は必ずしも国際機構が意図するような標準的な議論の枠には収まりきらなかった。以下では、具体的にタイ国内で巻き起こされたガバナンスの社会的議論を簡単に紹介しておきたい。

最初に、ティラユット・ブンミー (Thirayut Bunmi)⁹によって提唱されたタンマラット (*thammarat*) の議論を取りあげる必要があるだろう¹⁰。この言葉はサクスクリット語のタンマ (ダルマ) から来ている。タンマは仏法や仏教上の道義・正義などを意味し、ラットとは国家を意味するので、タンマラットとは「仏教的な正義にかなった国家の運営」という程度の意味になる。ここで注目すべきは、グッド・ガバナンスという言葉が、タイにおいてはこのタンマラットという概念に翻訳されて流布したという点である。ティラユットによれば、タンマラットは次の10の実践から成り立つとされる。

8 この間のタイにおける政治・行政の変革については、玉田／船津編 [2008] を参照。

9 ティラユットは、1970年代のタイにおける民主化を求めた学生運動指導者の一人で、現在は大学で教職に就いている。評論活動を通して現代タイ社会への影響力も大きい。

10 この議論はタイの代表的新聞マティションでも取りあげられた [Matichon Raiwan 1998.1.26]。

第1に、(通貨)危機の中にあっても国民の力を結集すること、第2に、国民が積極的に参加しながら、今回の危機の原因を徹底的に究明すること、第3に、透明で公正な、かつ説明責任を果たす公共サービスを実施すること、第4に、経済の問題を社会や文化などと関連づけながら考慮すべきこと、第5に、拙速を避け長期的な視点にたった経済回復の道を目指すこと、第6に、国家的な意志決定に国民を参加させる制度を構築すること、第7に、国際的な外部の機関に主導された改革ではなく、タイ独自の自主的な自己改革の道を探ること、第8に、国王が提唱した「ほどほどの経済」を実施すること、第9に、消費者を重視し情報を開示する道筋をつけること、第10に、国民や各地に存在する地域社会(コミュニティ)が保持している力強さを育成していくこと、という10項目である。

ここで注目しておきたいのは、国際的な外部の機関に主導された改革ではなく、経済の問題を社会や文化に関連づけながら、タイ独自の改革の道を探るべきだと指摘している点である。この点は、標準的なグッド・ガバナンス論への批判として、本稿の2でも見たとおり、多様な社会や文化にも注意を向けるべきだと指摘された点に呼応している。

そして、タンマラット論で具体的な実践項目に含まれるのが、国王の「ほどほどの経済」や強固な地域社会(コミュニティ)の育成である。この2点は、タイにおけるタンマラット、グッド・ガバナンス論の重要な論調とも重なり重要なので、それぞれ具体的に見ておきたい。

まず、「ほどほどの経済」論は、1997年12月の国王誕生日前日に行われた毎年恒例の国王講話に端を発する。まさに時期的に通貨危機のまっただ中である。講話の中で国王は「(経済の)虎になることが重要なのではない。大切なのはちょうど生活できるだけのほどほどの経済なのだ」¹¹と述べている¹²。この考えはその後、タイ国家経済社会開発庁の政策に引き継がれ、小委員会を作って実施策を練るなどの進展を見せていく。そこでは、外部社会から押

11 [Matichon Raiwan 1997.12.5] を参照。

12 「ほどほどの経済」は一般的に「充足経済」と訳されることや、仏教的な概念を背景としていることから、「足を知る経済」と訳されることもある。また、ここで述べられている「虎」とは、世界銀行がかつてタイを、韓国、香港、台湾、シンガポールに次いで経済的な成長を遂げる「第5の虎」と呼んだことを踏まえている。末廣 [2009] なども参照。

し寄せ危機をもたらすインパクトに対して、タイ社会に根付いてきた知識や節度、仏教的道理などによってうまく対応し、タイ独自の道を歩むべきことが説かれている。こうした独自の道がタイ的なグッド・ガバナンスとして認識されていくのである。

タンマラットの重要な項目として挙げられた、地域社会(コミュニティ)の育成に関しては、マヒドン医科大学の副学長も務め、NGOをはじめとするタイ社会の論壇を牽引しているプラウエート・ワシー (*Prawet Wasi*) 医師¹³が「強固な社会」論を展開している。

プラウエートは、仏教の道德倫理を基礎に、地域社会(コミュニティ;タイ語ではチュムチョン)を経済、社会、文化の基本単位に据えて、自給的な農業経済を構想する。彼によれば、「タイ社会はコミュニティの強固さが大切だと認識すべきであり、コミュニティの戦略を国家の戦略とすべきだ」[Prawet 1994a: 38]と述べる。彼は、タイのコミュニティには、互いに協力や協働する強固な基盤が満ちあふれており、それが本当の意味でのタイ独自の民主主義の単位になっていくのだと強調するのである [Prawet 1994b: 15]¹⁴。

そして、この「強固な社会」論は、いわばタイ独自のコミュニティを基礎とする社会的なガバナンスの問題として受け止められ、具体的な国家の政策として取り入れられていった。つまり、1997年に施行された新しい憲法や第8次国家経済社会開発計画¹⁵という、まさに国家統治の基本的なあり方と開発政策の基本方針を定めた計画の中で実現されていったのである¹⁶。

以上、ここではタイの全国的なメディアなどで議論されたガバナンス論やグッド・ガバナンス論を概観した。グッド・ガバナンスの概念としてタイで

13 プラウエートは早くから医療制度改革にも取り組み、コミュニティに権限を移譲することの必要性を訴えている。1981年にはマグサイサイ賞を受賞し、タイの社会的な意見形成に非常に重要な役割を果たす存在となっている。

14 1980年代からタイでは「コミュニティ文化 (*watthanatham chumchon*)」論と呼ばれる議論も大きな影響力を持っている。そこでは特に農村部で独自に育まれてきたタイ固有の価値観や文化を理想化して称揚し重視する。この議論の展開と背景については、北原 [1996] や重富 [2009]、Thongchai [2008] を参照。

15 NESDB [1997] やThaemsuk [2002] を参照。

16 重富 [2009:40-45] を参照。

議論されたタンマラットの議論、国王による「ほどほどの経済」論や、コミュニティの潜在力を重視する「強固な社会」論、いずれもが、本稿の2で確認した国際機構による標準的なグッド・ガバナンス論とは大分差異を含んだ独自の議論がなされていたと言えるだろう。そこでは、タイの住民になじみの薄いガバナンスやグッド・ガバナンスの議論が、積極的にタイ的な社会、文化の文脈で翻訳され、読み替えられながら、独自のあるべき姿に置き換えられていた。標準的な議論が具体的な社会に持ち込まれた時には、現地社会の論理によって、これだけ大きな差異を生み出すということの証左と見ることもできるだろう。

そこで、次には分析の根をより下におろし、タイ農村社会の統治の現場で、具体的に何が「良き」統治として語られていくのか、微細な行為の過程から検討してみたい。

4. 相互行為の過程で語られる「良き」統治 —タイ農村のフィールドワークから

4-1. 村の中の国家

タイは、もともと制度的、公的な官僚機構が比較的発達した国であると言われる。その意味で、制度としての統治支配機構は相当程度整えられている。国家の諸機関は、軍、警察から県知事、郡長、村長へと辺境の村々にまであまねく行き渡る。各地の村落では、様々なかたちで国家が関係する行事や研修訓練などが頻繁に開催され、住民への働きかけが不断になされている。主に開発政策を題材にした先行研究ではこの点を、「村の中の国家(the state in the village)」と表現し、国家が村の一部になる程までに働きを強め、介入してきた統治、支配のあり方を指摘してきた [Hirsch 1989 : 36]。

本稿の事例として取りあげる調査地のタイ中部農村(ナコンサワン県K郡Dタンボン第1村)¹⁷でも、国家的行事としての国王、王妃誕生日や、村長な

17 タイの地方行政制度は上から順に、県(*cangwat*)、郡(*amphoe*)、行政区(*tambon*)、村(*mu ban*)と訳される。しかし行政区(タンボン)と村(ムー・バーン)の訳にはゆれがあるので、タンボンに

どに対する研修のほか、一般住民に対しても、農業技術や保健衛生を題材とする各種の研修訓練が、大きな存在感をもって盛んに行われている。中でもここでは、灌漑設備利用に関する研修とVillage Scout研修訓練という国家や行政が積極的に住民に関わる統治の現場に焦点を当てる¹⁸。そうしたタイの農村社会という行政末端の政治的な統治の場における、具体的な人々の相互行為を記述することで、何が「良き」ものとして語られ、行為されているのかという微視的な側面に焦点を当てていきたい¹⁹。

4-2. 灌漑設備利用に関する研修の相互行為(事例1)

まずは、調査村で行われたK郡の農業協同組合事務所所長らによる灌漑設備を利用している住民に対する研修の様子を見てみたい²⁰(写真1参照)。利用者委員会の委員長には住民の中から、タンボン行政機構議会議長²¹であるアパイ²²が選ばれ、研修当日もアパイ宅で行われた。ここで注意しておきたいのは、タイにおける農業協同組合は、住民らの必要性から組織されたものというより、国家側が組織する官製の要素が強いという点である。従って、村内の委員会は住民らによるものだが、それを監督する各郡にある事務所の所長は役人と見なされている。

午前中の農作業が一段落した10時頃に、灌漑設備を利用する住民が、徒歩やバイクでアパイ宅に集まってくる。会場のアパイ宅1階の吹き抜けには、寺院から借りた折りたたみ椅子が40脚程並べられ、奥正面に、それと向かい合って大きな机3つと、椅子がおかれている。集まった住民は、途中での出入りがあるが、のべにすると40名程で、女性が約半分を占める。正面の机に

関してはできる限りカタカナ表記とする。なお、地名は仮名とする。

18 研修訓練などの具体的場所を対象化すべき研究の必要性に関しては、タイの相互行為と社会秩序をめぐる人類学的研究史を整理した別稿の中で論じた [高城 2009]。

19 相互行為ということに着目し、コミュニティの中で権力を生みだしていく行為の過程に関しては、タイの地方選挙を事例に別稿で論じた。Takagi [1999] や高城 [2002] を参照。

20 この事例は1998年8月28日開催の研修である。

21 タンボン行政機構議会議長とは、地方行政末端の議会議長である。

22 本稿で用いる事例内の人名は、首相や国王、全国的に著名な人物などを除いて仮名とする。

は、左から郡の協同組合の事務所長、利用者委員会の委員長アパイ、利用者委員会副委員長の第8村村長ブン、もう1人の副委員長で第1村村委員など6名ほどが一般村民と向かい合って座っている。机の上には造花も飾られていた。

研修の内容としては、農業協同組合事務所によって定められた管理、運営上における細かな規約の説明が主に行われた。次に引用する発話は、事務所長が利用者委員会の役員を選ぶ意義について説明している場面のものである。事務所長は立ち上がり、身振りを加えながら、向かい合って座っている村民に語りかけていく。

事務所長：「従って、農業協同組合がうまくいくか、いかないかは皆さんにかかっています。私にかかっているのではありません。皆さんにかかっているということは、どういうことなのでしょう。うまくいくのは、皆さんが皆さんのために働いてくれる管理役員を選ぶからこそなのです。もし、皆さんの役員が良ければ、農業協同組合もうまくいくでしょう。そう、もし、皆さんが良い役員を選べば、農業協同組合も良い仕事ができるでしょう。そうです。わかりましたか。分かったら、手を挙げてください。」

集まった村民のほとんどが、手を挙げる。中には両手を挙げるものもいる。

ここで、行政末端の官僚でもある事務所長の発話にはいくつかの特徴が見られる。まず、発話の中に「うまくいく (*yu dai*)」という語や、「かかっている (*yu thi*)」という言い回しが繰り返して使われている。しかも、「うまくいく」、「かかっている」という語を自分で発したすぐ後に、繰り返してその語の意味を問いかけ、説明して見せている。まさに研修という場にふさわしく、反復によって内容をかみ砕き、それを自問自答を演じることで注意を引きつけながら伝えている。

また、ここでは繰り返しかみ砕き、ゆっくりと教え諭すテンポで発話がなされている。他にもこの発話には、「わかりましたか。分かったら手を挙げてください」にも見て取れるように、教室での教師と生徒のやりとりを思い

起こさせるような契機がうかがえる。

タイの農村社会において学校、特に小学校は村内もしくは近隣村に1校は存在している場合が多い。調査村でも、小学校が隣村との境界付近に寺院と隣接してあり、村の住民にとって身近な公共施設である。同時に小学校の教師も村の中において身近にふれ合う存在であるが、他方では、公務員という点で村内では少数の特異な存在でもある。教師自身も自らを他の農民達とは異なったある種のエリートとして認識していることが多く、特に生徒に接する際などには、まさに自らが卓越化された存在として相対している。村の住民も、こうした教師と生徒の対応のあり方を身近に見ており、この「分かりましたか。分かったら手を挙げてください」という発話から、教室でのやりとりをすぐに思い浮かべ、事務所長を住民ら生徒に対する教師という卓越化された特別な存在として認識していくこととなっている。

また他方では、「良い役員を選ぶ」という言葉も繰り返され、その重要性が強調されている。「良い役員」、「良い仕事」、「良い組合」と反復されているが、そこで「良い」が具体的に何をもって「良い」なのか、その具体的な意味は棚上げされて、説明されない。しかし、言葉が繰り返されることで、その「良い」という評価、レッテルが一人歩きしていくことになる。こうして、いつのまにか肯定的意味合い、評価が組合の仕事、役員に付与され、何よりもそれを主導する事務所長やその背後にある国家統治の善良性が、そこには喚起されていくことになるのである。そうした善良性はまた、教室を思い起こさせるやりとりの中で、事務所長や国家から住民に対して一方向的に付与されるものとして呈示されるかたちを取っている。

この研修以外の日常生活の中で住民が組合について語る時、「農業組合は良い仕事をする (*sahakon tamngan di*)」、「良い組合 (*sahakon di*)」という言葉が知らぬ間に口をついて出てくる場面が頻繁に見受けられた。確かに、灌漑設備を整備してくれ、その管理を手伝ってくれる農業組合事務所は、この時の住民にとって、特に問題もなく、水不足を解消してくれる評価されるべき存在であったと言えよう。しかし、他にも数ある評価の言葉の中で、住民が使ったのはやはり「良い」という研修の場で度々繰り返された言葉であった。そこには、国家から与えられた「組合=善良」というレッテルが、無意

識のうちに模倣され、正当なものに成っていく過程が見て取れるのである。

つまりここでは、国家統治の一部となっている組合の「良さ」自体は、具体的な内容が語られず空虚なままで、「良い」という評価のみが一人歩きしていく。そしてこの事例で注意しておきたいのは、組合の「良さ」は統治組織である組合自身の働きによるというよりも、組合員である住民個人に「かかっている」と強調され、それが受け入れられていく点である。では、国家側が住民個人に求める「良さ」とは具体的にどのようなものなのだろうか。次の事例では、国家側が統治の現場で何を「良き」こととして住民に語りかけ、働きかけるのか、研修訓練の相互行為の中に探してみたい。

4-3. Village Scout研修訓練の相互行為(事例2)

ここでは、国家が地方住民の支配、統治のために組織するVillage Scoutと呼ばれる研修訓練の場の相互行為を取りあげる。Village Scoutはタイ語ではルークスア・チャオバーン(*luksu'a chaoban*)という組織・運動として知られている。ルークスア・チャオバーンとはタイ語の字義的には「虎の子(ルークスア)民衆隊(チャオバーン)」を意味するが、世界各地のスカウト運動の性格も併せ持っている。

もともとは、1970年代を中心に活動を活発化させた組織で、タイで当時盛り上がりを見せていた学生、民衆運動に対抗して弾圧を加えるという反共産主義的性格を強く持っていた。それが、1990年代後半以降になると、反共のみならず、保健衛生などの新たな項目を加味しながら、4泊5日にわたる研修訓練を各農村で頻繁に繰り返すことで、国家から住民への直接的働きかけを再活性化させている〔小野沢 1977、Bowie 1997、Chayan 1984、Muecke 1980〕。

特に70年代には政府や国王が中心となり、財政的にもそれらの支援を受けてこの組織は拡大し、多くの住民を集めた研修訓練を頻繁に開催していた。90年代後半には、調査地郡内で少なくとも年に1回は研修を行うこととされていた。各村長が中心となって参加者を募り、1回の研修につき200人ほどが参加する。基本的に1つの村から10人ずつの参加者を出すことが望まれる。

実際に調査することができた98年4月の研修の例をみると、最年少が13歳、最高齢が58歳で、73%が10代の参加者、20代もあわせれば87%程にもなる。

主催者は、基本的に郡を単位とする国家の行政機構である。具体的には郡長が主催者となるほか、郡役所の官吏や職員、各村の村長、タンボン行政機構の議員などが、研修の準備、進行を取り仕切る。実際の研修活動を補助し動くのは、ウィッタヤコーン (*withayakon* : 専門家) と呼ばれる研修指導員で、1回の研修に20-30人ほどが参加する。彼らの中には、70年代の活動が盛んな時期に指導員として専門的に養成された経験のある者もいるが、その他は活動に熱心な小学校の教師や小売りの店主らが事前の講習を経て指導員となっている。しかしあくまでもプログラムを組み、研修を運営して行くのは、郡長を中心とした郡の官吏やガムナン (*kamnan* : タンボンの長)、村長などからなる主催者委員会であり、国家の行政機構が中心となっている。この研修訓練は、まさに国家の権力作用と統治が、多くの住民が集まる場所に集中的に及ぶ結節点ともいえる。

以下では、そうした統治の結節点とも言える場所で、行政末端の郡長が住民らに対して、何を政治的に「良き」こととして語っていくのか、具体的な行為の過程から明らかにしてみたい。研修訓練は基本的に4泊5日で行われるが、ここでは調査郡内で行われた訓練2日目の朝9時から始められる入隊儀礼の事例を取り上げる²³ (写真2参照)。

寺院に隣接する小学校の校庭に、幅20メートルほどの舞台が作られ、その上には台の上にラーマ6世の銅像と、額に入った現国王の写真、仏像、国旗がおかれている。ラーマ6世 (1910-25年在位) は、ルークスア・チャオバーンの原型となったスアパー (*su'a pa* : 野虎) という名の近衛師団を1911年に創設した国王である [Vella 1978:27-52]。舞台の前には、小さな演台がおかれ、それらに向かって参加者200名程がスカーフの色によって分けられたグループごとに整列させられている。舞台に向かって右側には、テントが2つ張られ、その中には来賓である副知事用のソファールがおかれている。主催者の郡長や官吏、ガムナン、村長などもテントの中に陣取っている。

23 この事例は1998年4月2日から6日にかけてK郡内の寺院周辺で開催された研修である。

郡長や官吏などはカーキ色の半袖、半ズボン(女性はスカート)、ハイソックス、帽子というルークスア・チャオバーンの制服を身につけている。また中央の参加者を挟んで向かって左側には、これも制服を身につけた指導員が、一列に整列して立っている。彼らは、かつてルークスア・チャオバーンの研修を受けたことがあることを証明する深紅のスカーフを首に巻いている。村民によれば、70年代にはこのスカーフをしていることが、「民族、宗教、国王」²⁴を守る良きタイ国民であることの自負ともなっていたと言う [Morell and Chai-anan 1981 : 245]。

まず、来賓の副知事が舞台の上のラーマ6世の像の前に進み出て、合掌し経を唱える。その際、副知事のすぐ後ろには郡長が控え、参加者の左側に整列していた指導員が移動し、参加者の前に横一列に並んで、皆で合掌して経を和す。その後、全員が片膝をついて頭を下げる姿勢をとり、全員でラーマ6世賛歌を歌い、「私たち下僕であるルークスアは、タイ国家、民族を信じ、敬います。…ラーマ6世がルークスアを支援なさり、民族と宗教を愛する心を涵養するよう研修を奨励なさいました」と、ラーマ6世と民族、宗教を称揚する。

その後、参加者による3つの誓いの言葉の反復復唱を経て、主催者であるK郡の郡長が挨拶に立つ。郡長は、参加者の左斜め前に演台を起き、舞台に向かって研修訓練開催の挨拶を述べる。舞台の前には来賓の副知事が郡長、参加者に対面して立っている。この場で郡長は、参加者らに向かってルークスア・チャオバーン研修の意義を語りかける。

K郡長：「今回のルークスア・チャオバーンの研修では、政府とナコンサワン県の両者の政策に報いるという目的があります。つまり、ルークスアの研修を受けた人は、自ら、あるいは国王の利益のために、規律正しく、国家の良き国民、臣民となるのです。あるいはまた、社会の一層の発展、開発を一丸となって支援するでしょう。それ以外に、

24 「民族(*chat*)、宗教(*satsana*)、国王(*phramahakasat*)」は、タイ国家の中枢をなすものと言われ、国旗にもこの3つを意味する色(赤、白、青)が使われている。石井 [1975] や末廣 [2009] などを参照。

特に重要なことは、プミポン国王が仏暦2542 (1999) 年に6回目の干支を迎えることを祝うということです。…私は、この寺院においてK郡の第16、17期のルークスア・チャオバーンの研修開催を宣言します。」司会者が号令をかける。

司会者：「全員、起立。(3つの)戒。」

全員が一斉に起立し、郡長に向かって右手の3本の指を立てた手を額にもっていき、敬礼の姿勢をとる。

ここでは、ルークスアの研修目的、意義が明確に語られている。それは国家や県の政策、働きかけにしっかりと答え、報いることだとされる。具体的には、「国王の利益のために、規律正しく (*mi rabiapwinai*)、国家の良き国民、臣民 (*phonlamu'ang di khong chat*)」となること、また「発展、開発 (*phatthana*)」を進めることの重要性が示されている。

国王の重要性は、研修の目的の一つに干支を祝うことを加味することで特に強調される。ここでは、国家の代理としての郡長が研修の参加者である国民に働きかけ、求められる範たる「良き」国民像を直接的に語りかけている。つまり郡長は、参加者が求められるべき「善良な良き国民、臣民 (*phonlamu'ang di*)」像を、国王や国家の意図する善良性の範疇の中に組み込んで呈示しているのである。

郡長の話の後には、司会者の号令によって全員が起立し、3本指の敬礼をする(写真3参照)。これは、3つの誓いの言葉、規律を遵守することの身体的な象徴の動作であり、研修の区切りごとに何度も繰り返される。3つの誓いとは具体的に、第1項が「民族、宗教、国王に忠誠を尽くすこと」、第2項が「常に他の人を助けること」、そして第3項が「ルークスアの規則に従って行動すること」である。

そして、郡長が参加者ひとりひとりに話しかけるときも、両者ともにこの3本指の敬礼をして会話を交わす。このような極度に形式化された動作を、全員が一体となって同時に、しかし個々の身体を介して個別的に反復することで、ある一定の身振りとその意味するものが、参加者のひとりひとりに浸透していくことになるのである。

ここで注意すべきは、訓練の行為の中で反復されていく身体動作の内容が、「民族、宗教、国王に忠誠を尽くし」「他の人を助ける」という国家の用意した道徳律であり、その内容が埋め込まれたものだったということである。つまりこの行為の過程を通して、政治的に正当なあるべき「良き」ものが、国家の意向に沿ったかたちで参加者の身体に記憶として沈殿していくと考えられるのである。それは、タイにおけるひとつの統治の過程であり、末端におけるガバナンスの一断面だと見なすことができるだろう。

こうして、人々の相互行為にまで分析の根を下ろすことによって、政治的にあるべき「良き」ことが、行政末端の統治の現場で具体的に如何に語られ、かつ国家側の導く意図のもとに如何に生み出されていくかという微細な過程を見いだすことが可能となるのである。

5. おわりに

本稿は、グッド・ガバナンスという概念について、標準的な国際機構の言説のみならず、本来何がグッドとされ、ガバナンスとは如何なるものなのかという具体的な現地社会の実態と論理の一断面を、タイを事例にして明らかにしてきた。

そのために、まず2では国際援助機構などによる標準的なグッド・ガバナンス論を概観した上で、そこに向けられる批判を整理した。中でも本稿で注目したのは、被援助国側の多様な文化や社会に十分な注意を払わないまま、援助側の外部の論理や視点によって対象国の政治に介入していくことに対する批判であった。従って、本稿ではタイという現地社会の論理と実態に焦点を当て、その社会内部の視点からグッド・ガバナンスの一断面を照射しようとしたのである。

次の3では、国際機構からの標準的なグッド・ガバナンス論が、新聞メディアなどのタイ国内の社会的論調において、どのような文脈で捉えられ議論されてきたのかを紹介した。そこでは、タンマラット、「ほどほどの経済」、「強固な社会」論など、標準的な議論とは異なった文脈での議論がなされていた。つまり、標準的な議論が、現地の文脈で読み替えられながら、タイ社会独自

のあるべき姿の議論に置き換えられていたのである。中でも特に目立ったのは、仏教的正義との関連づけや、国王の提唱する経済のあるべき姿、あるいは、コミュニティの独特な強固さによる下からの社会的ガバナンスの可能性などの議論であった。仏教や国王、タイ的なコミュニティという、まさに地域社会独自の論理が卓越した論調となっていたのである。

その上で4では、分析の視座を現地社会の最深部にまでさらに下ろし、タイの農村社会という行政末端の政治的な統治の場において、何が具体的に「良き」ものとして語られ、行為されているのかという微視的な側面に焦点を当てた。

事例1では、灌漑設備利用に関する研修という国家の行政機構が末端の住民に直接対面する場所を取りあげた。そこでは、国家統治末端の官僚でもある農業組合事務所の所長が、「良い組合」、「良い役員」という言葉を繰り返し強調する一方で、何が「良い」のかという具体的内容は棚上げにされ、内容が空虚なまま、「良い」という行政への評価のみが一人歩きしていく行為の過程が見てとれた。また、この所長の語りで特徴的だったのは、国家側の行政や統治に対する「良い」という評価が、行政機関である農業組合自身の働きや内容によって付与されるものではなく、住民一人一人の働きによるものだと説明されていたことである。

そこで、国家行政側が、統治の現場で、住民一人一人に何を「良き」こととして語り、求めていくのか、Village Scout (ルークスア・チャオバーン) 研修訓練の相互行為の中で分析した。この事例2では、郡長の言葉の中で「国家の利益のために、規律正しく、国家の良き国民、臣民」となり、「開発・発展」を推進していくことが強調されていた。そして国民としての「良き」ことが、「民族、宗教、国王に忠誠を尽くすこと」や「常に他の人を助けること」などの誓いの言葉として語られ、敬礼という身体動作を通じて教え込まれていた。つまり、具体的に統治の現場で語られる「良き」ことは、国家が用意した道徳律であり、かつその道徳律とは、タイに特有な独自の文脈である国王や宗教(仏教)と関連づけられた「良き」ことであった。しかも、ルークスア・チャオバーンというこれもタイ特有の研修訓練の場所で、実際に住民個々人の身体を通じて統治が語られ、行為されていったのである。

こうして、事例1で見たように、国家や行政機構それ自身に求められる具体的な「良き」ことは、棚上げにされる一方で、国家の「良き」統治の成否は、「民族、宗教、国王」に尽くす「良き国民」の働き次第にかかっているという論理にすり替えられていく。国家や行政の「良き」統治の中身は、空虚なまま具体的に語られることなく、「良き」国民としての個人がタイ特有の「良き」道徳的行為を成すべきこととして置き換えられてしまっていたと見なすことができるだろう²⁵。ここでは、国家による「良き」統治が、個人によるタイ的な「良き」道徳行為とイコールで結ばれていくことになるのである。

本稿は、国際機構を中心に議論される世界標準のグッド・ガバナンス論とは別の視点に立ち、タイを事例に具体的な現地社会の多様性と独自の論理からグッド・ガバナンスの一断面を照射しようとした。

当たり前のことではあるが、現地社会の人々は、具体的な顔を持った歴史社会的な状況的存在として現実に生活をしながら現在を生活している。標準的グッド・ガバナンス論であるべきとされる統治や制度は、そうした顔をもった具体的な人々によって、かつ、具体的な時と場所における行為を通じて、語られ、運用されていく点を忘れ去ってはならないだろう。本稿が示唆するのは、そうした生きた統治や制度の現場から、グッド・ガバナンスの具体的なあり方に光を当てていく試みが、今後も決して欠くことのできない必要不可欠な視座だという点なのである。

25 ここでは反面、「悪い」統治や「悪い」政治は、道徳的に正しくない「悪い」国民の責任だとされていくという、容易な論理の反転に結びついてしまう可能性が残ることに留意すべきである。

参考文献

日本語文献

- 石井米雄 1975『上座部仏教の政治社会学—国教の構造』 創文社。
- 井上淳 2006「途上国におけるグッド・ガバナンス、汚職対策と国連システム、EU—貧困とのたたかい」『慶應法学』4 63-101頁。
- 大西裕 2004「グッド・ガバメント論とグッド・ガバナンス論—東アジア諸国の経験」『アジア研ワールド・トレンド』101 28-31頁。
- 小野沢正喜 1977「タイにおけるナショナリズムと村落の変動—Village Scout運動に関する文化人類学的研究」『比較教育文化研究施設紀要』27 九州大学比較教育文化研究施設 29-47頁。
- 北原淳 1996『共同体の思想—村落開発理論の比較社会学』世界思想社。
- 国際協力事業団 1995『参加型開発と良い統治』国際協力事業団。
- 佐藤秀雄 2001「ガバナンス論の現状と課題—開発援助における新たな方向性の模索」『福岡国際大学紀要』5 51-62頁。
- 重富真一 2009「タイにおけるコミュニティ主義の展開と普及—1997年憲法の条文化に至るまで」『アジア経済』50(12) 21-54頁。
- 下村恭民 1998「経済発展とグッド・ガバナンス—実効ある政策論議への脱皮のために」『国際協力研究』14(1) 1-8頁。
- 下村恭民編 2006『アジアのガバナンス』有斐閣。
- 末廣昭/山影進編 2001『アジア政治経済論—アジアの中の日本をめざして』NTT出版。
- 末廣昭 2009『タイ—中進国の模索』岩波新書。
- 高城玲 2002「権力を生みだすコミュニティ—中部タイの地方選挙」田辺繁治・松田素二編『日常の実践のエスノグラフィ—語り・コミュニティ・アイデンティティ』191-212頁。
- 2009「タイの人類学的研究からみる相互行為と社会秩序」『国際経営論集』38(神奈川大学) 141-156頁。
- 玉田芳史/船津鶴代編 2008『タイ政治・行政の変革 1991-2006年』アジア経済研究所。

英語文献

- Bowie, K. 1997 *Rituals of National Loyalty : An Anthropology of the State and the Village Scout Movement in Thailand*, Columbia University Press.
- Chayan Vaddhanaphuti 1984 "Cultural and Ideological Reproduction in Rural Northern Thailand" , Ph.D. thesis, Stanford University.
- DAC/OECD 1996 *Sharing the 21st Century : The Contribution of Development Co-operation*, DAC/OECD.
- Hirsch, P. 1989 "The State in the Village : Interpreting Rural Development in Thailand" , *Development and Change* 20 : 35-56.
- IMF 1997 *Good Governance : IMF' s Role*, IMF.
- Morell, D and Chai-anan Samudavanija 1981 *Political Conflict in Thailand : Reform, Reaction, Revolution*, Oelgeschlager, Gunn & Hain Publishers.
- Muecke, M. A. 1980 "The Village Scouts of Thailand" , *Asian Survey* 20(4) : 407-427.
- North, D. 1990 *Institutions, Institutional Change and Economic Performance*, Cambridge University Press.
- Takagi,R. 1999 "Interaction and Power Relations: A Village Head (*kamnan*) Election in Central Thailand" , *Tai Culture* 4 (1) : 153-168.
- Thongchai Winichakul 2008 "Nationalism and the Radical Intelligentsia in Thailand" , *Third World Quarterly* 29 (3) : 575-91.
- UNDP 1997 *Governance for Sustainable Human Development*, UNDP.
- Vella, W. 1978 *Chaiyo : King Vajiravudh and the Development of Thai Nationalism*, Hawaii University Press.
- World Bank 1989 *Sub-Saharan Africa : From Crisis to Sustainable Growth*, World Bank.
- World Bank 1992 *Governance and Development*, World Bank.
- World Bank 1999 *Comprehensive Development Framework*, World Bank.

タイ語文献

Matichon Raiwan 1997.12.5

Matichon Raiwan 1998.1.26

NESDB (National Economic and Social Development Board, Thailand)

1997 *Phaen Phatthana Setthakit lae Sangkhom Haeng Chat thi 8 (pho. so. 2540- 2544)* (第8次国家経済社会開発計画1997-2001年), NESDB.

Prawet Wasi 1994a *Yutthasat Thang Panya khong Chat : Yutthasat thi Samkhan thi sut khong Sangkhom Thang Mot Ruam kan* (国家の知的戦略—社会全体の最重要戦略), Munnithi Phumipanya.

——— 1994b *Kan Phatthana Prachathipatai lae Kan Pathirup thang Kan Muang* (民主主義の発展と政治改革), Samnak Phim Mo Chaoban.

Thaemsuk Numnon 2002 *Sapha Rang Rathathammanun : Sen Thang kan Pathirup kan Muang Thai* (憲法起草委員会—タイ政治改革の道), Sathaban Pra Pok Klao.

写真資料

写真1：灌漑設備利用に関する研修

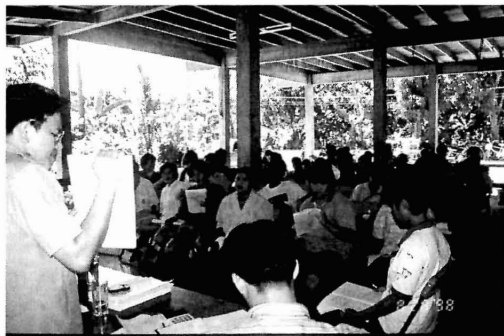


写真2：Village Scout研修訓練の入隊式



写真3：Village Scout研修訓練の入隊式における三指の敬礼

